

# 光のシークエンス： 大洲 大作 Sequences of Light Daisaku Oozu

4.22[Tue.]—5.4[Sun.] 11:00～19:00  
closed on Mon. / until 20:00 on Fri. / until 18:00 on last day

Gallery PARC  
GRAND MARBLE



## 展覧会について | About

本展は今年で2回目の開催となる国際写真フェスティバル「KYOTOGRAPHIE」のサテライト展である「KG+ (ケージープラス)」への参加展覧会です。また、Gallery PARCではこの開催期間にあわせ、「夏池風月展」(4/8～4/20)、「大洲大作展」(4/22～5/4)、「麥生田兵吾展」(5/6～5/18)の3つの写真展を連続開催。本展はその第二弾となる展覧会です。

大洲大作(おおず・だいさく/1973年・大阪生まれ)は、1994-95年まで大阪国際写真センター(現、IMI 写真表現大学)にて写真を学ぶとともに、1997年に龍谷大学文学部哲学科を卒業。以後、京都・大阪・ベルリンでの発表を経て、2012-13年には東京ステーションギャラリー 再開館記念企画「始発電車を待ちながら」展へと出展するなど、着実に活躍の場を広げています。

代表作である一連の『光のシークエンス』は、そのすべてが列車やバスの内からガラス窓越しに外に向けられた眼差しによるもので、車窓というフレーミングの中に通り過ぎる風景を「連続する光の有り様」として、見慣れた、あるいは初めて訪れた旅先の風景は光に還元され、そこに目に見えない「光景」を浮かび上がらせています。また、その光はストロークや滲みを持った線・面となって、そこに絵画的な抽象性も見せるものであり、この点から大洲はファインダーによるフレーミングによってプリント上に光景を「描き出している」とも言えるのではないのでしょうか。

流れる(スクロールする)風景からカットアップされた美しくも幻想的な「一瞬(1コマ)」の光の様相は、「写真」としての本質的な特性を最大限に活用した表現として見ることができます。しかし、それらが集積・展開される本作において、それぞれの作品が「断片」としてゆるやかな繋がりを見せはじめる時、そこには光(時間)の連なりといった事象のみならず、日常や旅情の中にある茫漠とした情感や物語をも鑑賞者に起想させるものとなります。

本展では東京ステーションギャラリーで発表したプリントとプロジェクションを再構築して展示するとともに、大洲の出身地である関西取材した新作『hometown』を合わせて発表いたします。

ひとつひとつのコマ(車窓)は鑑賞者の記憶や想像により自由に連結され、再び緩やかにスクロールをはじめるとはならないのでしょうか。

## 大洲 大作 | Oozu Daisaku

写真をメディウムとする作家。京都・大阪・ベルリンのギャラリーと東京の美術館の企画展、ドイツの雑誌等にて作品を発表。列車などの「車窓」にうつり滲む「光」に、目には見えない光景を追う『光のシークエンス』、風景の「影」に潜むものを探る作品『INVISIBLESCAPES』などを制作している。

1973年大阪生まれ。1994-95年に大阪国際写真センター(現、IMI 写真表現大学)にて写真を学ぶとともに、1997年に龍谷大学文学部哲学科を卒業。アートプロジェクト「東京画」参加作家としても活動。

### 個展

- 2013 「PANORAMIC WINDOW/光のシークエンス」(サイギャラリー, 大阪)
- 2013 「光のシークエンス」(ENTRE DEUX, 東京)
- 2012 "INVISIBLESCAPES Images from Fukushima and all parts of Japan" (galerie son, ベルリン)
- 2010 「光のシークエンス」(space B, 京都)
- 2008 "Illusions of the Sea" (galerie magenta, ベルリン)
- 1999 "NO MAN'S LAND" (The Third Gallery Aya, 大阪)
- 1996 「漫透庄」(The Third Gallery Aya, 大阪)

### グループ展

- 2012-13 「始発電車を待ちながら」(東京ステーションギャラリー)
- 2011 東日本大震災復興支援チャリティ写真展 "FOR YOUR SMILE 311" (中之島デザインミュージアム, 大阪)
- 2009 "Spiral Independent Creators Festival" (スパイラル, 東京)
- 2007 "Junge Kunst" (galerie son, ベルリン ミッテ地区)

## 質疑応答: Questions and Answers

### ■展覧会について

現在まで取り組んでいる作品『光のシークエンス』の行方を探る展覧会。本作の来し方と現在を検証し、行く末にまなざしを向ける。また、学生時代を過ごした京都での展覧会であることも含め、これまで多く描いてきた北の車窓に対し、今回初めて、生まれ育った関西の車窓を追った作品を制作して展示する。

作品とは、うつろいである。現しであり、写しであり、また映しである。うつろいもの、不可視の光をうつろい、私にとっての業である。

### ■展覧会タイトル『光のシークエンス』とは？

そこに一切の「光」がなければ写真という手段は不可能である。あるいは写真であればこそ、うつろい明滅する「光」というきわめて多義的な概念に正面からまなざしを注ぐことができる。また写真において時間は支配的な位置を占める一方、露光時間の長短にかかわらず、影としてうつろい残るものはただワンフレームの図像である。そのような特性を持つメディウムを用いながら、本来的には「一瞬」として取り出し得ない連続した時の中の事物を表現しようとするならば、それは一瞬のみならず、連続した一瞬を捉えようとする試みとなるだろう。うつろい、明滅する可視の光、そして不可視の光が連なり、さまざまに軸を得て、シークエンスを形作ってゆく。

### ■写真に関わる様になったきっかけは？

乗り物に興味を抱き、それを写真に撮るようになるという流れは、私の世代の男の子にはとても自然なことだったと思う。ある日「自然な流れ」からドロップアウトした後写真を手放すことはなかった。写真には、物質性と非物質性が分ちがたく宿命づけられている。そこにも共感を覚えるのかも知れない。

### ■『光のシークエンス』に取り組むきっかけは？

移動こそが思考をすすめ、また意識を開放させる。ある一点へおもむいて撮影した次の点へ向かうことに飽き足らず、その「間」あるいは「界面」への着目こそが自分、と認識したことが、この作品の始まりとなった。旅は、そして生は、点ではなく連続と続く線である。

## 展示作品 | Works

- pic.1 北越急行 ほくほく線  
赤倉信号場 列車後端から見た赤信号
- pic.2 東京地下鉄 銀座線  
外苑前駅～表参道駅 地下鉄の車窓
- pic.3 北陸本線  
小松駅
- pic.4 福島交通 南相馬 - 川俣・福島線  
飯舘村 15kmに渡り無人の村内を走る
- pic.5 秋田内陸縦貫鉄道 秋田内陸線  
西明寺駅～八津駅
- pic.7 北越急行 ほくほく線  
儀明信号場 難工事で知られた鍋立山トンネル内
- pic.9 豊肥本線  
南熊本駅～平成駅
- pic.10 五能線  
鯉ヶ沢駅～陸奥赤石駅
- pic.11 奥羽本線  
弘前駅
- pic.12 山陰本線  
莊原駅～直江駅 平成23年豪雪の最中
- pic.13 三陸鉄道 北リアス線  
野田玉川駅～堀内駅 震災2カ月前。ここは1年後に復旧
- pic.14 石勝線  
新夕張駅～樫信号場 列車先頭からのトンネル内の青信号
- pic. A 山手線  
目黒駅
- pic. B 総武本線  
稲毛駅
- pic. C 光のシークエンス — northern country
- fig. A 光のシークエンス — hometown

